



水やりが教えてくれること

校長 山本 郁雄

学校の玄関前には、一・二年生が育てている植木鉢が整然と並んでいます。登校した子どもたちはまず自分の鉢に向かい、昨日より広がった葉に気付いて目を輝かせたり、しっかりとしてきた茎を支えながら水をあげたりしています。芽生えたばかりの小さな命にそつと声をかける姿もあり、その表情には、育ちゆくものを見守る温かなまなざしが宿っています。

葉が増え、茎が伸び、芽がふくらむ。この時期の植物は日々の変化が最も楽しめる頃です。けれど、その姿は一日でつくられるものではありません。雨の日も晴れの日も続けてきた世話の積み重ねが、確かな成長を生み出しています。その光景は、子どもたち自身の学びの姿と重なって見えます。

四月から新学期がスタートして三か月が経ち、子どもたちの心にもさまざまな「芽」が生まれています。友だちとの関わりの中でふくらむ優しさの芽、授業への挑戦から顔を出す自信の芽、思い通りにいかない経験から育つ悔しさの芽。どれも、これからの成長を支える大切な芽生えです。

そして、植物の伸び方が一つひとつ

異なるように、子どもたちの成長の歩みも様々です。早く大きくなる苗もあれば、ゆっくりと葉を広げる苗もあります。大切なのは急がせることではなく、その子がその子らしく伸びようとする力を支えること。毎朝の水やりに向かう子どもたちの姿は、「待つことの価値」を静かに語りかけているようです。

「急がせない」「信じて見守る」これは植物を育てるときにも、子どもを育てるときにも欠かせないキーワードです。水やりを終えた子どもたちは満足そうに教室に向かいます。ほんの僅かな時間ですが、その中には、「責任」「継続」「気付き」「思いやり」といった人生の土台となる学びが詰まっています。鉢の中で育っているのは植物だけではなく、子どもたち自身の心の「葉」も広がり、「茎」もまっすぐに伸び、「芽」も確かにふくらんでいます。

毎日の水やりが教えてくれるように、成長とは、気付いたときにはすでに始まっているものです。新潟小学校は、一人ひとりの小さな変化を丁寧を受け止め、これからもその成長をしっかりと見守ってまいります。